

四川における1950～60年代の民族研究（2）

—李紹明が語る「中国少数民族問題五種叢書」と政治民族学

松岡 正子

「中国少数民族問題五種叢書」（以下、五種叢書と記す）は、中華人民共和国における民族研究の大きな成果の一つである。これらは、人民共和国創立期の1950～60年代に少数民族地区において実施された国家規模の調査結果をもとに、1980年代に一部補充され、公刊された。しかし当時、同時期の政治上の諸政策と不可分に進められたために政治性が強くうちだされた部分があり、後に、学術的に一定の資料的・史的価値をもちながら、資料的価値においてかなりの制約を有すると評価されている。

21世紀にはいって、この五種叢書は相継いで修訂・再版された。国家民族事務委員会（以下、民委と記す）は、修訂・再販にあたって五種叢書に対する民委の公式評価と修訂の意味を述べている。しかしそこに述べられた内容は、外国人研究者にとってわかりにくい部分が少なくない。当時の諸政策と調査との関係が十分に明らかにされていないからである。四川省民族研究所の李紹明氏は、四川における当時のほぼすべての民族調査に参加した当事者の1人として、近年、複数の口述記録を公刊している。特に2009年の『変革社会中の人生与学術』は、当時の民族調査と五種叢書編集に関わる状況とそれに対する私見を率直に語ったもので、五種叢書を理解するには極めて有用である。

本稿では、まず近年の修訂再版の意味を検討したうえで、四川における1950～60年代の民族調査と五種叢書編集について李紹明氏の口述記録を中心に再構成し、五種叢書の再評価を試みる。

1. 「中国少数民族五種叢書」修訂・再版の動きと意味

(1) 1950年代の「民族問題三種叢書」

五種叢書とは、1980年代に公開された『中国少数民族』『中国少数民族簡史叢書』『中国少数民族簡志叢書』『中国少数民族社会歴史調査資料叢刊』『中国少数民族自治地方概況』をいう。しかしその原点は、1950年代に編集された「民族簡史」「民族簡志」「民族自治地方概況」の「民族問題三種叢書」（以下、三種叢書と記す）にある。

三種叢書の編集について、上野稔弘はつぎのようにのべる¹。三種叢書は「ポスト反右派闘争・大躍進期の少数民族社会歴史調査の新たな任務として設定」され、「1959年10月1日の建国十周年の献呈本としての完成をめざした」。しかし「大躍進の挫折とともに刊行が再三延期され、約半数が未公開で終息した」と。これは、三種叢書がまさに当時の政策の一環として企画されたものであることを示している。

当時の政治的背景は次のようである。人民共和国成立後、中央政府は1950～52年にかけてまだ人民共和国に統一されていない西北、中南、西南の3つの少数民族地区に中央訪問団を派遣して民族政策を宣伝し、民主改革を進めた²。四川では、特に彝族地区で黒彝を中心とした反対の動きが根強く、民主改革は1955年末から60年まで続いた。それとともに、1956年には民族識別工作の資料収集のために内蒙古、新疆、西藏、四川、雲南、貴州、広東、広西の8つの少数民族歴史調査組が組織され、1958年には寧夏、甘肅、青海、湖南、福建、遼寧、吉林、黒龍江の8つを加えて16の調査組に拡大され、動員された者は1000人を超えた。少数民族社会歴史調査（以下、社歴と記す）は1956年から64年まで行われた。

1 上野「民族誌的記憶の更新－「中国少数民族問題五種叢書」の改訂をめぐって」（2011年11月12日国立民族学博物館共同研究「中国における民族文化の資源化とポリテクス－南部地域を中心とした人類学・歴史学的研究」での報告）

2 民主改革とは、漢族地区で進められた土地改革の少数民族版といえるが、民族地区の事情に応じて支配階級の一部の上層人士を改革の協力者として温存し、平和的な話し合いを行った〔松岡 2011：105－107〕。漢族地区では地主は敵対分子（地、富、反、壊、右）とされたが、民族地区では必ずしもそうではない。例えば彝族地区では奴隸主は敵対分子ではなく、選挙権被選挙権をもち、政治協商会議の代表や副県長にも選ばれた。ただし入党は曲諾（白彝）と奴隸（実は多くが略奪されてきた漢族）に限られ、州・県・区・郷の主導権は白彝に移った〔李・伍2009：182〕。

その一方でほぼ同時期に、中央では新たな政治的動きが始まっていた。1956年に百花斉放・百花争鳴³、続く57年後半から58年にかけての反右派闘争である。民族地区に赴いていた社会歴史調査の指導者たちも次々に北京によびもどされ、「鳴放」した者は次の反右派闘争で批判された⁴。社会歴史調査は、これを境にトップの多くが替えられただけでなく、調査内容も大きな方針転換をせまられ、全面的な調査から政治経済に重きをおく政治色の濃いものへと変わった。

三種叢書は、1959年10月1日の建国十周年の献呈本として企画されたもので、反右派闘争と大躍進のもとで方針転換せざるをえなくなった社会歴史調査組が新たに受けた任務であった。李紹明は「その任務をわずか1年足らずで完成させることが不可能であることは誰もがわかっていたが、(我々は) たえまなく調べ、たえまなく書き続けた。しかし実際はどれも使いものにならないものだった」と語る〔李 2009: 196～197〕。三種叢書は、全体の約3分の1が出版されたところで文化大革命が始まり、残りは原稿段階で中断された。費孝通はこれについて「50年代後期より、三種叢書を何度も繰り返し修正したが、多くの人が「追いつく」ことで消耗した。当時多くの人が直せば直すほど読む人がいなくなると言った…この風潮が起きたことで正道から逸れた」とする〔上野 2011: 1〕。費孝通も李紹明も、政府の指導に沿った「修正」が現況とは大きく離れていたこと、三種叢書執筆は正道から外れたものであり、不毛の仕事であることを誰もが承知していたが、それでも書き続けざるをえなかった、と回顧する。

(2) 「五種叢書」 修訂再版

上野報告によれば、張養吾は「民族問題五種叢書」編集出版工作の総括報告(1989年)で、初版において(刊行本のなかには)準備不十分、新しい研究成果をいれていない、改革開放後の変化が記入されていない、

3 中国共産党が1956年に唱えた自由化スローガンで、文学芸術活動、科学研究活動において独立志向の自由をもち、言論の自由をもつべきことを提唱した。しかし共産党の教条主義と官僚主義を批判するようという要請に応じて発言した知識人は、これを危惧した毛沢東の指示によってブルジョア“右派”とされて批判され、反右派闘争が始まった〔天児慧等『岩波現代中国事典』1999年1070～1071〕

4 費孝通、楊成志など(欧米留学組)その社会の遅れた部分ばかりを見ており、階級矛盾や階級闘争の観点に欠けていると批判された〔曾士才 1995: 23〕

本文中に誤りがあるなどの不備があり、修訂再版時に修正の必要があると述べた。さらに国家民委は、2006年3月国家民委修訂「民族問題五種叢書」工作会議において、五種叢書修訂を2008年昆明開催の世界人類学大会にあわせて2007年に出版するとした。呉仕民の報告では、修訂の理由を五種叢書は価値を継承すべきであるが、歴史的制約のために体裁・様式・内容の質が不統一であり、現在では入手困難であるとのべ、修訂の原則を、正確な理論指導（マルクス主義的歴史観・民族観・文化観・国家観・宗教観）、实事求是と発展刷新の原則、党の民族政策の堅持とするとしている〔上野 2011：2～3〕。

修訂再版を2008年世界人類学大会中国開催にあわせるとしたことは、三種叢書が1959年の建国十周年記念のためであったことを思いおこさせる。しかも近年、学術的にはすでにほとんどふれられなくなった1950～70年代のマルクス主義堅持を冒頭にあげていることはいかにも政治的である。費孝通が「正道から逸れた」といい、張が五種叢書初版刊行後に「歴史的な原因」とした政治と密接に繋がった、当時のマルクス主義民族学への批判と反省に対して、再び学術性から離れた政治性の強いものへという逆行が明らかである。

その結果、李徳沫が2007年五種叢書修訂再版総序で「基本的に現状を保持し、体裁・版型を統一し、新たな内容を加える」とした修訂版は、確かに体裁・版型が統一され、1980年代から2000年代にいたる新たな動きや数値が加えられているものの、学術的に手を加えるべきではない部分が削除あるいは減じられ、資料的価値にまたしてもある種の制約がかけられている。上野は「初版本がもっていた特色が大いに減じ、編集方針自体は1990年代以前の形式を踏襲しており、1990年代以降各地で執筆・出版されている民族誌との乖離がめだっており、この傾向は『民族自治地方概況』に顕著である」とする。上野は、事例に『徳宏傣族景頗族自治州概況』（民族出版社2008）をあげ、章立ての統一化、民族自治に関する記述の圧縮、新聞出版や環境問題などの1990年代以降の新内容が加わるなど内容の大幅な再編が行われ、内容の地方志化が進み、民族誌的性格がより希薄になったと指摘する〔上野 2011：3〕。ここに指摘された、内容の地方誌化という点が、初版本の優れた点の一つである民族誌的部分を減じる大きな要因であるといえる。

四川の少数民族関連の五種叢書修訂版においても、同様の傾向がみられる。社会歴史調査資料の一つである修訂版『羌族社会歴史調査』では、内容の変化はほとんどないが、体裁は他と統一され、さらに封面の50～60年代の写真が「原版はかなり古くなっていて質的に問題がある」という理由でカットされている。旧写真のカットは、その学術的資料性を全く無視したもので、民族誌という意味では改悪である。

民族自治地方概況の一書である『北川羌族自治县概況』（民族出版社2009.6 以下『北川概況』と記す）は、北川羌族自治县が1987年以降に成立した16の民族自治地方の一つであるため新編である。よって『北川概況』には政府の修訂増版の方針が明確に反映されており、1980年代の『茂汶羌族自治县⁵概況』（四川民族出版社1983、以下『茂汶概況』と記す）とはかなり異なっている。『北川概況』は、改革開放以降の社会的経済的發展の状況を増補し、2008年の汶川大地震の記録として「抗災救災和災後重建」を1章としてたてたことから全14章の構成となり、『茂汶概況』の全7章に較べて総量が2倍強になっている。また構成は、『北川県志』（方志出版社1996）に倣って細分化され、民族地区の貧困脱出の核心産業として注目されている旅遊を第9章に新設する。内容は、1980年代以前の状況については『北川県志』の記述との重複が多い。特に文化については、『北川県志』のチャン族の記述には岷江流域のチャン族のそれからかなり引用されており、『北川概況』にも、岷江流域のチャン文化⁶との同一性を示そうとする編纂者の意図が踏襲されている⁷。

また『北川概況』で興味深いのは、民族区域自治と漢族に関する記述で

5 阿壩州茂汶羌族自治县は、全国で唯一の羌族自治县として、茂県、理県、汶川県の3県が合併して1958年に成立したが、1987年に阿壩藏族自治州が阿壩藏族羌族自治州になった時に茂県に戻った。

6 羌族の伝来の文化は、岷江流域側の羌族に色濃く伝えられている。白石をシンボルとする山神信仰や、「許比」（羌族の巫師）による山羊を犠牲とした宗教的儀式、伝来の石積み网络技术を用いた石造り家屋（碉房）や高さ数十メートルの石碉、羌織などが特色とされる。

7 この背景には、北川県では漢族との交流が深く、多くのチャン族が「漢民」とされていたこともあって、人民共和国以前にすでにチャン語やチャン族文化の特色をほとんど失っていたことがある。そこで1980年代に民族回帰を進めるにあたって、県政府は県内だけではなく、隣接する茂県のチャン族文化についても調査と収集を進めた。現在、北川県のチャン族文化と称するものの中には、茂県から借用してきたものも少なくないという（2009、2011年の松岡の現地調査による）。

ある。第1は、北川チャン族の民族回復と複数の民族郷の成立から2003年の民族自治県にいたるまでの詳細な過程である。北川県のチャン族は、1953年にはわずか25人にすぎなかったが、1980年代の民族回復を経て、2005年には91,953人に達した。本書には、1950年代初めに北川県の多くのチャン族が漢族のまま民族変更をしなかったのは、民族幹部の歴史知識が不足していたからだとのべられており、民族幹部が80年代以降、民族回復と民族自治県成立に強い意志で臨んだことがうかがわれる。

第2は、民族区域自治に関する、改革開放後の具体的な記述である。民族区域自治の実態については、地方政府幹部に主体民族が採用されるといった程度の情報しかわからなかったが、本書の第3章民族区域自治には法制建設（第3節）と民族関係（第4節）が新設され、前者には2006年の「北川羌族自治条例」について、後者には政策措置として各種の経済面での支援、優遇策が具体的に記されている。

第3は総人口の約40%を占める漢族について、民族の項だけではなく他項においても漢族の文化についてほとんど述べられていないことである。1990年代の『北川県志』では漢族を含めた民族別に風俗習慣や宗教信仰、文化藝術についての記述があったのが、新編『北川概況』では漢族にほとんどふれないばかりか、民族別の文化に関する記述も全体に薄くなっている。これは他の民族自治地方概況叢書にもみられる傾向である。

総じていえば、修訂版民族自治地方概況は、各地域の地方志のダイジェスト版といった体裁に統一され、政治・経済・社会の分野を中心とした記述となっている。また民族別の文化を主体とした記述が縮小されただけでなく、「漢族」に関する記述がカットされている。しかし民族地区の漢族は、年々流入人口の増加が著しく、さらに、21世紀に入って民族区域自治法が改正され、優遇対象については、従来の少数民族だけに限っていたのを漢族を含めた民族地区に居住するすべての民族に変更されている〔北川羌族自治県概況編纂委員会 2009:00〕。すなわち中央政府は民族地区における民族区域自治を、従来の少数民族への優遇を主とした民族自治から、区域全体の民族を優遇する区域自治へと大きく転換したといえる。それが五種叢書修正版や新版ではあえて漢族の姿を薄くし、少数民族を強調するような、現状に逆行した記述となっている。

2. 李紹明が語る四川における 1950—1960年代の民族研究

(1) 李紹明の生涯と民族研究

李紹明氏 (1933～2009、土家族) が語るところによれば、父は重慶市秀山土家族苗族自治県出身の土家族で、民国期に四川西部の民族地区で官吏となって漢源県県長を務めた後、商人となった。母は徳陽県出身の漢族で、実家は地主、叔父は地方政府高官で成都西城警署署長であった。李紹明は1933年成都で生まれ、樹木三小、成都中学を経て石室中学 (高校) に進学後、1950年、16歳 (高校2年) で華西協和大学社会学系民族学組に入学。比較的富裕な知識人の家庭で育ち、『資治通鑑』などの中国古典も読破した。華西大では自由な雰囲気の中で欧米派人類学を学んでいたが、1952年院系調整のため華西大学社会学系が閉鎖され、やむなく四川大学歴史系に編入、53年には西南民族学院民族問題研究班に入り、54年西南民族学院を卒業。その後、阿壩州民族幹部学校教員となる。この経歴が後に「教会大学の最後の学生、新中国が養成した第一世代の学者、民族学と歴史学、西方理念と中国の伝統的道德観念を学んだ」と称される由縁である。

また学生時代から民族地区での西南訪問団などのフィールドワークに参加した。チャン族地区については、1951年夏の一ヶ月間、茂県の沙壩区黒虎郷と赤不蘇地区で県政府の工作隊として郷政府建設工作と民族調査に参加。当時、チャン族地区の頭人には、黒虎郷の何廷禄、赤不蘇区の陳瑞龍、王泰昌、黒水の陳瑞龍、王泰昌、蘇永和等がいた。政府は共産党を支持していた何廷禄を仲介として懐疑的であった陳瑞龍や王泰昌らを説得したが、蘇永和は1951年に反乱をおこした。調査では、4～5人が一組になって戸別調査を実施。漢語のできる男性をインフォーマントとして、まず統一された調査表によって家長の名前や年齢、民族、家族構成、家庭経済などの基礎データを取り、さらに政治制度や経済状況 (生産力、作物、生産工具)、家庭婚姻、物質生活、衣食住などを聞き取るという全面的な調査であった。1956年に阿壩民族幹部学校に赴任してからは、学生とともに赤不蘇区や理県蒲溪郷を毎週末に調査。1961～64年は社歴の羌族分組に参加して、三種叢書の執筆を担当した。

イ族地区については、1952年に1ヶ月、川南民族訪問団とともに小涼山

俄辺地区で調査。当時、イ族地区にはなお国民党の特務と土匪が残っており、イ族の頭人に暴動を勧めていた。中国共産党は国民党に対抗してイ族を共産党側に引き入れる工作を進めた。1956年中央政府が社歴を組織すると、李氏は四川調査組に入って涼山彝族地区での社会形態調査に参加。57年イ族上層部が民主改革に反対して反乱をおこすと李は中央慰問団に入れられ、慰撫工作に数ヶ月従事し、58年からは雲南で『彝族簡史』の編集にあたった。しかし1950年代から文革終了までに「肅反」「反右傾」「文化大革命」などによって「三起三落」（3回失脚して3回復帰）した。そのことで「たびたび周辺に追われながらも必ず中心にもどる」者とも称された。

1980年代以降は、中国民族学学会や中国人類学学会の発足に参加。華西の地においては四川省民族研究所所長や西南民族学学会会長等を歴任し、「六江流域（後に費孝通の呼称に基づいて「藏彝走廊」）総合開発」や「南方絲綢之路」「康巴学」等を提唱し、調査隊を率いて『雅砻江上遊考察報告』『雅砻江下遊考察報告』『葛維漢民族学考古学論著』『（馬長寿）涼山羅彝考察報告』等を編輯し、次代の研究者の育成に尽力した。主要著書に『羌族史』（共著）、『民族学』『李紹明民族学文選』『巴蜀民族史論集』等がある。その一生は、中国人類学・民族学の建国以後の発展、および建国以来の国家の民族工作の進展過程と密接に関係し、当時、一体何があったのかを欧米流民族学とマルクス主義民族学の両方を学んだものとして冷静かつ詳細に語ることのできる人物の一人である。

『変革社会中の人生与学術』（2009）には、まさに民族学者李紹明しか語るができない、編年体の学術史を補う「真実」が記されている。巻頭の「整理説明」によれば、王銘銘（北京大学）は、西南民族大学編「西南地区民主改革口述史調査」の中で出会った総顧問の李氏（当時73歳）を、「教会大学の大陸最後の学生、新中国が養成した第一世代の研究者、西南のチベット地区やチャン族地区、イ族地区をほぼ踏破したフィールドワーカー、多くの学術研究機構の創立と指導のリーダー、学術活動が半世紀を越え、自ら中国人類学・民族学会の重大事件に関わってきた」研究者であると評価した。口述記録『変革社会中の人生与学術』は、北京大学や中央民族大学の博士課程学生数名が、王銘銘の指導のもと、2006年10月から計6回のインタビューを行い、2007年6月と2008年9月に伍婷婷がさらに補充を加え、

3か月の修訂作業を行って約6万字の最終稿を完成させたものである〔李・王2009：1～6〕。

(2) 李紹明が語る1950～60年代の民族調査

李紹明は、近年、西南中国における1920年代以降の民族研究に関して講演や取材の中でたびたび当時の状況を紹介している。本節では、シアトルでの講演記録（以下、1999年記録と記す）と論文「西南民族研究的回顧と前瞻」（以下、2004年回顧と記す）、口述記録「1950－1960年代的民族調査」（以下、2004年口述と記す）、口述記録『変革社会中的人生与学术』（以下、2009年口述と記す）を中心に、1950～60年代の民族調査と民族研究の再構成を試みる。

1950～60年代の民族調査について、2004年口述では、1950年からの民族識別調査（以下、識別と記す）と1956年からの少数民族社会歴史調査（以下、社歴と記す）をあげ、両者の違いをつぎのようにのべる〔李・王2004：1～7〕。2つの民族調査の違いは、目的が、識別は民族区域自治実施のために少数民族の数を確定することであるのに対して、社歴は、第1に民主改革と社会主義改造のために少数民族の社会状況と社会形態を確定すること、第2に各民族の専史を書くことにある。また主催単位が、識別は国家民委、社歴は最初は全国人大民委、58年以降国家民委にかわる。

当時の状況は、2004年口述によればつぎのようである〔李・王2004：1～7〕。

識別については、四川では雲南や貴州などのような大規模調査は必要ではなかった。各省少数民族の区別が比較的明確であったからだ。当時の四川は、行政上は川東、川南（楽山専区）、川西（茂県専区）、川北に分かれており、川西北南のチベット族、チャン族、イ族の区別は明確であった。大涼山彝族のいる西康は含まれていなかった。ただし川西北と川西南はなお中央政権にとって未開の地であったため、各級政府は民族訪問団を派遣した（1951、52年川西少数民族訪問団、川南民族訪問団）。その目的は次の4つである。第1に、漢族と少数民族は歴史的に対立関係が続いてきたため民族関係の修復が必要であった。第2に、党の民族政策を宣伝して時代が変わったことを知らせ、民族内部の対立を解消す

る必要があった。第3に少数民族の回復と生産発展を助け、第4に少数民族の状況を理解することである。李紹明は華西大学在学時に、四川大や華西大、西南民族学院の専門家や学生と共に1951年川西茂県専区でチベット族チャン族を調査し、52年川南峨辺県で彝族調査に参加している。

民族訪問団の仕事は学術工作であるとともに民族工作でもあった。当時、茂県専区や黒水地区はまだ未解放で、国民党や土匪の残党が暗躍していた。公路も未開通で、地方政権はまだ樹立されていなかったため政治的には不穏であり、調査隊員は銃を携帯したが人的犠牲もでた。調査にあたっては、まず灌県（現在の都江堰市）で1週間分の食糧をそろえ、荷物を馬にのせて茂県まで5～6日歩いて行った。茂県赤不蘇区のチャン族頭人・王泰昌は初め共産党に懐疑的であったが、度々の説得を経て共産党側についた。当時の調査結果は川西区党委などが秘密事項として保存し、1980年代にようやく正式刊行されたが、このような状況はほぼ全国でみられた。当時の調査資料は、西南民族学院から3本の調査報告『草地調査報告』『嘉戎藏族調査報告』『羌族調査報告』として出版された。これらはみな第一次資料を基にしたもので、現地の政治経済文化の各方面の歴史と現状について系統的かつ詳細に書かれており、後の民族工作や区域自治、新工作分野のための基礎資料となった。

続いて1956年から少数民族社会歴史調査が始まった。その目的は、民主改革⁸を展開するにあたって、まず各民族地区の異なる社会性質を決定することであった。民主改革後に予想される大きな変化の前に急いで資料を集め、元来の社会形態や面貌を記録しておくことが任務であり、学術的意義だけではなく強い政治的意義があった。毛澤東の指示をうけた全人代常務委員会は56年に8つの調査組を組織し、58年には調査組を16まで拡大して、調査組をすべての民族地区に派遣した。調査組は専門家と民族工作者から構成され、2000人以上（通訳をいれると4000～5000人）が動員された。構成は、トップが彭真（中央政治局委員）、事務局は全人代民委におかれ主任は夏輔仁であった。四川組は組長が夏康

8 民主改革が漢族地区の土地改革と異なるのは、漢族と少数民族の間に歴史的に存在してきた対立関係を考慮して、直接的な闘争をしない、財産没収をしない、少数民族の上層部をとりこむという穏健な方針がたてられた点にある〔李2009：00〕。

農（自然科学専攻）で、北京から中国科学院や大学、博物館などから20～30人が集められ、四川からは四川大や西南民族学院、四川財經学院、西南音専、四川省博物館、四川省民委、涼山省委などから29人が選ばれた。李紹明は四川省委民族工委の命で四川組の學術秘書になった。なお貴州組の組長は費孝通だった。

調査地点は慎重に選択され、中心地区と辺縁地区、その中間点など比較の視点をもっていた。調査では1つの調査地に3～4か月とどまり、社会学と民族学の調査方法を用い、戸別訪問を行い、質問表（提綱）によって当事者に家族構成や経済状況、政治的地位、社会関係、文化活動などを聞いた。昼間は住民に聞き取りをするとともに労働に参加したり民主改革工作を手伝ったりし、夜は調査記録を整理した。農家に宿泊し、農民と同じものを食べた。1957年にはイ族の反乱がおき、チベット族地区でも治安の不安定な状況となり、犠牲者もでた。皆が銃を携帯し、イ族に対する慰撫工作と民族調査を続けた。当時、調査組は工作组でもあった。涼山彝族社会の社会性質については、奴隸社会か農奴社会であるか等、調査と討論が続いた。1958年に社歴は一段落し、中国の少数民族の社会形態がほぼ確定された。また膨大な調査資料と大量の写真、科学記録フィルムが得られた。これまでこれほど大規模で詳細な民族調査は世界でも行われておらず、世界の民族学界に対する中国民族学界の一大貢献であるといえる。

しかし社歴には欠点がある。社会の意識形態面に対する調査が少なく、系統的ではないことである。改革開放後に宗教調査が補充実施されたが、それはあくまで補充にすぎない。また58年に各民族の社会形態が確定された後、中央政府は新たな任務として建国十周年の記念事業に三種叢書の編集刊行を決めた。1959年から1963年までの4年間は社歴と民族史志叢書の編写を行った。民族の族源や歴史発展過程、歴史上の人物や事件がはっきりしていなかったからである。それは、中国史学が伝統的に中原（漢族）を重視して四夷を軽視してきたからであり、しかも多くの少数民族は文字をもたず、自ら書いた文献記録もなく、口頭伝承は史実としてはしばしば不正確なことによる。1956年からの社歴は当時、見て、触れて、簡単に掴むことのできる目の事を知りえたにすぎず、数千年、

数百年、数十年という歴史を記すことはとても難しかった。

1959年以降の社歴は、任務が変わったために管轄が全国人大民委から中国科学院民族研究所に移り、表面的には学術性が強まった。四川組は名称が「中国科学院民族研究所民族社会歴史調査組」となり、組長は以前と同じ夏康農、副組長は劉忠良（西南民族学院副院長）で、彝族組、藏族組、羌族組、苗族組の4組に分かれた。調査地域は、彝族組は西昌専区と涼山州、藏族組は甘孜州と阿壩州、羌族組は阿壩州の汶川、理県、茂県、松潘県、苗族組は宜賓専区、瀘州専区、涪陵専区で、土家族は当時数千人にすぎなかったため、調査組は組織されなかった。

当時四川民族調査組に与えられた任務は、羌族簡史簡志合編1冊、彝族の簡史と簡志2冊（上編に奴隸制、下編に農奴制と地主経済）、藏族の簡史と簡志2冊（西藏1、青海、甘肅、四川と雲南の藏族1）であった。この任務は、調査に1～2年、執筆と補充調査に2年かかり、1964年に数冊の初稿が完成した。しかし「三面紅旗」（総路線、大躍進、人民公社）の問題は解決できなかった。政府は「三面紅旗」の内容を三種叢書に必ず反映させるように求めたが、「争論」は大きく、反復も多かったため定稿を出す事ができず、改革開放後、ようやく公刊された。李紹明自身は『彝族簡史』『彝族簡志（上編）』の一部と『羌族簡史簡志』の全ての編集に加わり、『羌族簡史』は後に『羌族史』にまとめられた。

社歴の各組は、1964年に各省に民族研究所がたてられ、組員がそこに分属することになって解散した。四川では、1959年に中国科学院四川分院ができ、分院には哲学社会科学研究所（現在の四川省社科院）と民族研究所が設けられたが、1964年に中央から地方の科学院は哲学社会科学の研究は行わないという決定がだされたため、哲学社会科学研究所は四川省委宣伝部の管轄となって四川省哲学社会科学研究所と改名し、民族研究所は省委宣伝部の管轄となって四川省民族研究所になり、中国科学院民族研究所四川少数民族社会歴史調査組は四川省民族研究所と合併した。16の民族調査組も同様に現地の民族研究所と合併し、解散した。李紹明も1956年に社歴調査組に参加して以来、全人代民委、中国科学院民族研究所、四川省民族研究所へと所属が移った。しかしほどなく文化大革命がはじまり、四川省民族研究所所員はみな米易湾土丘の「五七幹校」

におくられ、その後10年間、研究は中断された。民族研究所が再開されたのは中共十一届三中全会後である〔李 2004:1～7〕。

以上の記録から、1950～60年代の民族識別調査と少数民族社会歴史調査をめぐる時系列的展開を知る事ができる。四川では、識別が未解放の少数民族地区を対象として党の宣伝と慰撫仕事を兼ねて進められ、民族工作という一面を強くもっていた。しかし民族調査も同時に行われ、その報告書『草地調査報告』『嘉戎藏族調査報告』『羌族調査報告』が公刊された。この三冊は現在も全面的な調査に基づく優れた報告であると評されている。また社歴については、59年を境に三種叢書の任務が加わったことで調査の性格が一層政治的になっていったことがわかる。2004年口述では特にふれられていないが、2009年口述では調査方針の転換の背景には57～58年の反右派闘争があり、調査組の構成や調査内容に大きな影響を及ぼしたことが実名をあげて説明されている。

しかし新たな任務の三種叢書編集に関しては、少なくとも外国人研究者にはわかりにくい。「(政府は)「三面紅旗」の内容を三種叢書に必ず反映させるように求めたが、「争論」は大きく、反復も多かったため定稿を出せず…」という記述は、「三面紅旗」の実態がなお十分に語られてはいないと感じる筆者にとっては「争論」の具体的な内容がわからない。また李が指摘する社歴の欠点についても、なぜ「意識形態方面」が欠けることになったのか、説明が必要である。2009年口述は、これらの疑問に答える内容が記されたものである。

(3) 「三種叢書」と社会歴史調査

2009年口述記録は、他の記録が時系列的で公的な記述であるのに対して、ライフヒストリー形式で多くの私見が率直に述べられ、時系列的記述の行間を埋める説得的なものとなっている。そこには、1950～60年代に中央政府が新たな理論であるマルクス主義を学界および知識人にどのように周知徹底させていったのかが、個人の体験を通して語られる。1952年の院系調整とその後の肅清、56年の百花争鳴、57年の反右、58年社会歴史調査組の管轄変更と新たな任務、三面紅旗と三種叢書、(62年全人代での指示)などがどのように連鎖しながら進められたのが、李の語りを通してうかが

われる。

まずマルクス主義への学説統一から思想統一にむけて、1952年の院系調整のことが語られている〔李・伍 2009：186～198〕。

1952年の院系調整によって、教会系であった華西大は医科歯科のみを残して社会学系や郷建系が廃止され、教育系が西南師範学院（重慶）に、中文系や外文系、歴史系、経済系が川大の関連学科に合併される。川大では政治学系、社会学系、人類学系が廃止された。当時、人類学は資産階級の学科とみなされた…我々は怒り、誤った論証論理であると感じた。社会学がなぜ資産階級の科学なのか。（政府によれば）科学には資産階級と無産階級の別があり、社会学は偽科学である。なぜなら無産階級社会主義社会では社会問題はすでに解決しており、資本主義にのみ社会問題はあって、無産階級には社会学は必要ない。また社会学は資産階級の改良、太平の粉飾を行うものとされた。…しかし1957年に右派とされた者の多くが社会学、人類学を学ぶ者であったのはなぜか。社会学に対する政府の見方を認めなかったからなのか、それを（「鳴放」で）公開した老世代の学者たちは資産階級の社会学、資産階級の人類学を復活させようとする者であるという罪状であった…（我々は）ソビエト学派が唯一正しい学派であるとは思わなかった。アメリカからきたから資産階級の学派で、ソビエトから来たから無産階級のそれと単純に割り切れるものではない。しかし主流はすでに定まっており、社会的にそれを否定することはできなかった。

つぎに1957年「鳴放」とその後の「反右」で欧米の社会学、人類学を学んだ学者たちの追放、1956年から始まっていた社歴が「反右」後の1959年から方針を変えざるをえなかったこと、新任務の「三種叢書」が「三面紅旗」を記さなければならなかったために、多くが信用できない記録となったことが述べられている〔李・伍 2009：198～205〕。

民主改革や社歴がまだ終了していない段階で「反右（整風）」が始まった。それ以前は、思想は活発で民主的雰囲気があった。社会歴史調査組がまだ郷村で調査を進めていた時に、全国人大民委は社歴の幹部層を北京に召集した、費孝通（雲南組長）、呉澤霖（貴州組長）など当時有名であった民族学者は「鳴放」し、後に「右派」とされて調査から外された。罪

名は社会歴史調査中に経済基礎を重視せず、資産階級の社会学や民族学を復活させ、婚姻家庭や風俗習慣を調べたからだという。

しかし四川調査組は、夏康農（四川組長）の指示によって経済基礎、階級分析を重視し、文化や家庭婚姻、親族制度などの調査はしなかった。夏康農は周恩来と親しく、百花争鳴と反右派が何を意図したものであるかがわかっていたからである。これに対して費孝通ら右派とされた者はみな民主党派か無党派であり、初めから狙われていた。当時、我々は理解できなかった、(全面的な調査は)人類学民族学の本分ではないか、文化や制度などの調査はするなというが、無産階級に婚姻家庭がないというのか、と。その結果、雲南組と貴州組の調査は全面的であったが、四川組は偏っているとの評価を後日うけることになった。

「反右」後、社歴に参加していた費孝通をはじめ多くの民族学者が右派とされて調査を離れ、調査の方向が大きく変わった。中央統戦部と国家民委は新たな任務として建国十周年を祝う「民族問題三種叢書」の編集を命じた。しかし当時は「反右」のために「民族志」は書けないことを誰もがわかっていたため、みなどのように書くべきかに腐心した。58年から65年まで何度も修正したが定稿はだせなかった。1958年からは調査も簡史簡志編集のためになされた。調査で多くの新生事物（主に「三面紅旗」）を調べた。「三面紅旗」について書かなければならなかったからである。しかし「三面紅旗」は変化が激しく、書いた時には正しくても、すぐに間違いとされた。公社や食堂がどのように建てられ、鋼鉄がどのように精錬されたのかを調べたが、これらは「虚報浮誇」（ウソと誇張）の報告で使うことはできなかった。数字もウソだし、大衆が公社をたてた、人民公社は天国である、公共食堂は架け橋であるなどという宣伝も全く偽りだったからだ…。

1958年に民主改革が終了して、大躍進、人民公社が始まった。人民公社では、すぐに公共食堂化が徹底され、食糧は公共食堂に集められ、個人は竈の使用も許されず、煙を出すと竈が壊された。李のいた昭覺県城近くの南坪公社では、食事は1日2回、朝10時と夕方5～6時のみで、宿舎から食堂まで片道約40分かかった。生産も生活も自由がなく、時計をもたなかったので時は太鼓がつけられた。皆の仕事ぶりは形式的で、実質

的に仕事時間は短縮され、生産量が落ちた。四川では、公共食堂は1年もたたないうちに食糧を食い尽くした。

昭覚県南坪公社の彝族は、民主改革によって自由な身となり、土地ももらったが、初級合作社を経ないですぐに高級合作社（集団所有制）に移行して土地を没収されたため「騙された」と感じ、怒っていた。さらに人民公社になってからは、土地を奪われただけでなく、公共食堂までの往復に時間をとられ、家には何もなくなかった。まるで「旧社会」に再度もどったかのようなのだ。と。また食糧不足で、多くの人が餓死し、浮腫ができた。涼山には家畜も乳製品も肉製品もなかったからだ。浮腫対策に、まず人尿から作った小球藻を食べ、米糠から作った糠服散を飲んだが、効果はあまりなかった。幸い私は家畜の多い阿壩州の羌族調査組に配置換えされたために命拾いをした。人々はとても不満であったが言い出すこともできず、黒彝の頭人はみな打倒されていたので組織的に反抗することもできなかった。

このような状況のなかで、「三面紅旗」を中心に記さなければならない「三種叢書」を1958年10月1日から1959年10月1日までのわずか1年で編集するなど本来は不可能であった。しかし大躍進時はウソと誇張の風が盛行していた。人々は本心を語っていないし、我々が書いたものも本心ではない。にもかかわらず休みなく調査し、やすみなく書き続け、最後には人民公社や公共食堂の解消まで書いた。いつも完全には書けなかった。なぜなら解放後の党の栄光の成果、とくに三面紅旗を何度も書きなおさなければならなかったからである。そもそも公社化の歴史を正面から書くなどできるはずがなかった。大躍進時期の多くの調査は「廢紙」（紙くず）であり、1958年以後の資料の一部は信じることはできない。ただし当時の档案や大量の調査資料は反面教材として有用である。

李紹明は、社歴の限界についてもつぎのようにのべる〔李1999：4～7〕。

1957年反右以後、社歴では人類学的方法を使えず、社会性質（生産力、生産関係、階級分析）に関する調査項目があるのみで、社会制度、家庭、婚姻、風俗、習慣、宗教などがなかった。これを超えることは許されず、聞くこともできなかった。もしそうすれば資産階級民族学の視点とみなされ、身分を剥奪され、批判を受けるからである。社歴は、本来、全面

的調査であるべきだが、四川では「社会性質調査」にしばられた。これは人類学・民族学の研究分野ではなく、政治経済学のそれだ。

李紹明が関与した『羌族社会歴史調査』（以下『羌歴』と記す）は、1983年に補充調査された「羌族宗教習俗調査資料」以外は、1950年代の羌族小組の調査報告を中国科学院民族研究所・四川少数民族社会歴史調査組が執筆編集した「初稿」（1963年）をもとに編集され、1986年に公刊された。「初稿」は記録形式で、聞き取りを実施した年日時、場所、インフォーマントが冒頭に明記され、文献資料からの引用の場合は出所（引用箇所のない）が記されている。しかし『羌歴』では、聞き取りに関する日時やインフォーマント、出所等が注にいれられたため、聞き取りや引用、編者による執筆部分などの区別が曖昧になってしまい、第一次資料がもつ特色が減じられている。

ただし2009口述では、四川組は1958以降、調査では政治経済を中心として文化部分をとりあげなかったとしているが、1963年「初稿」には少量ではあるが風俗宗教（文化）の記述がみられる。例えば『阿壩藏族自治州理県通化郷社会調査報告（初稿）羌族調査材料之三』（1963.12）には、1. 概況、2. 社会生産力、3. 生産関係、4. 政治状況のあとに5. 風俗習慣与宗教信仰の項（15～17頁）がある。5. の風俗習慣宗教信仰は全面的な記述となっており、1952～53年川西北民族訪問団での調査を基にした『羌族調査材料』のそれと類似していて、反右以降の方針変換の影響はみられない。前言によれば、通化郷の「初稿」は中共理県县委による1954年12月の調査を油印した『理県通化郷調査材料彙集』と中国科学院民族研究所四川少数民族社会組による1958年以來の調査を整理したとあり、風俗習慣等の記述が前者によるもので、信頼できる資料である。これに対して『茂汶羌族自治县黑虎郷社会歴史調査報告（初稿）羌族調査材料之三』（1963.10）では、1. 概況、2. 解放前生産状況、3. 経済構成和階級関係、4. 搾取方式、5. 几戸地主的典型材料、6. 几戸農民的典型材料、7. 反動的政治統治和人民的反抗闘争、8. 宗教信仰与風俗習慣、9. 紅軍的過境及其影響、10. 從解放到土改、11. 從土改到人民公社という11章構成になっており、章名がすでに当時のマルクス主義的政治用語である。8の宗教信仰・風俗習慣は、前言によれば1959年1月の調査であり、隨所に事象に対する政治的評価が加えられて

いる。例えば「近百年來、由于受漢族影響、許多村寨在地主階級的倡導下（地主階級に扇動されて）、又建立了不少廟宇、利用神道設教以欺騙群衆（神道を利用して民衆をあざむいた）」〔1963:14〕などである。1963年「初稿」に、反右の影響を受けた記述とそうでないものがそのまま記されているところに編者の意思が窺われ、興味深い。

おわりに

「中国少数民族五種叢書」は、1950～60年代の民族研究においてほとんど唯一の成果ともいえるが、当時の政治との不可分の関係から打ち出された政治性の強さのためにこれまで十分に活用されていない。本稿は、その成立と展開を当事者の口述記録にもとづいて再検討することによって、その新たな価値の発見と再評価を試みたものである。

まず第1章では、近年の修訂再版が新たな装丁に変わっただけでなく、内容が再び、民族誌よりも「政治的」なものに巧みに替えられていることを指摘した。つぎに第2章では、この10年間に公刊された李紹明氏の口述記録をもとに四川における1950～60年代について、政治的動きと様々な民族調査や五種叢書編集などの民族研究との関連を通時的に再構成し、検討した。建国以降のほとんどすべての民族研究関連の出来事に関わってきた李紹明氏の口述記録は、実に多くの「事実」を語ってくれている。筆者は、まだ十分にその「事実」を解読しえていないが、本稿は五種叢書や当時の他の記録報告を理解するうえの新たな第一歩である。

今後は、20世紀前期に盛行した辺疆研究にまでテーマを広げて、西南中国における民族研究の意味と展開について考察を深めていきたい。

参考文献

北川県志編纂委員会編纂（1996）『北川県志』方志出版社

北川羌族自治県概況編写組・北川羌族自治県概況修訂本編写組（2009）『国家民族問題五種叢書之三 中国少数民族自治地方概況叢書 北川羌族自治県概況』民族出版社

羌族簡史編写組（1986）『国家民族問題五種叢書之一 中国少数民族簡史叢

四川における1950～60年代の民族研究(2)

- 書 羌族簡史』四川民族出版社
- 四川省編輯組(1986)『中国少数民族社会歴史調査資料叢刊 羌族社会歴史調査』四川省社会科学院出版社
- 西南民族大学西南民族研究院編(2008)『民主改革与四川民族地区研究叢書 川西北藏族羌族社会調査』民族出版社
- 曾士才(1995)「中国国内の民族学」『中国文化人類学文献解題』東京大学出版会 21～24
- 中国科学院民族研究所四川少数民族社会歴史調査組(1963)『茂汶羌族自治县黑虎郷社会歴史調査報告(初稿) 羌族調査材料之三』
- 中国科学院民族研究所四川少数民族社会歴史調査組(1963)『阿壩藏族自治州理県通化郷社会調査報告(初稿) 羌族調査材料之三』
- 茂汶羌族自治县概況編写組(1985)『国家民委民族問題五種叢書之一 中国少数民族社会歴史調査資料叢刊 茂汶羌族自治县概況』四川民族出版社
- 松岡正子(2011)「四川における1950～60年代の民族研究(1)」『愛知大学国際問題研究所紀要』第137号97～115
- 李紹明(2004)「西南民族研究的回顧与前瞻」『貴州民族研究』2004年第3期 50～55
- 李紹明口述、王林録音整理(2004)「1950-1960的民族調査」『当代史資料』2004年第1-4期 1～7
- 李紹明口述、伍婷婷記録整理(2009)『変革社会中的人生与学術』北京・世界図書出版公司
- 李紹明口述、彭文賦録音整理(2010)「西南少数民族社会歴史調査-李紹明美国西雅图華盛頓大学講座(二)(1999. 4.15)」『西南民族大学学报』(人文社会科学版)2010年1期1～7
- 李紹明口述、李錦録音整理(2007)「李紹明先生訪談録」(『中国西南民族研究動態』2007年第1期)
- 李紹明・松岡正子主編(2010)『四川のチャン族 汶川大地震をのりこえて〔1950-2009〕』